

天象「あめ【雨】」の世界に学ぶ「自主ゼミ：コラム」

1-1-5: 雨と清少納言

傘がないけれど雨に濡れながら恋人に逢いに行こう、と歌ったのは井上陽水（「傘がない」作詞・作曲：井上陽水）だ。

平安時代に生きた清少納言は、雨に濡れて愛しい人に逢いに来る男に対して手厳しい。日頃はあまり来ない人が雨のひどく降る日にやってくる嬉しさが心に沁みる、などという女性がいるが、とんでもない。いかにも男の意図が透けて見えるし、汚れた足を洗うのは汚らしい、という。

一方、風や雪、野分のわきなどに対しては好意的だ。『枕草子』274段に、

さらでは何か、風などの吹く、荒荒しき夜きたるは、たのもしくをかしようもありなん。雪こそいとめでたけれ。忘れめやなどひとりこちて、忍びたることは更なり。

といい、雪の夜の訪れこそが素晴らしい、雪に濡れた妙趣だという。

雨に対しては、

雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいとにくくぞある。

こうして見てくると、清少納言はどうも雨は好きではなかったようだ。

しかし、一晚中降った雨が止んで朝日がさしはじめたときに、

「透垣、羅文、薄などの上にかいたる蜘蛛の巣の、こぼれ残りて、所々に糸も絶えさまに雨のかかりたるが白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ」（125段）

と、蜘蛛の巣に乗った露を愛でる箇所など、雨の風情を豊かな観察眼をもつて表現することも行っていたりする。

清少納言は清原家に生まれ育ち、一条天皇の妃、定子に仕えたが本名も生年没年も詳しいことは何も分かっていない。内裏で暮らす女房として、身辺の雑事や雑感を百科事典風に記した「随筆集」として、その瑞瑞しい感覚や表現の歯切れの良さで多くの読者のこころを魅了してきた。

雨を疎み、他方で雨を愛でる清少納言のこうした感覚は、現代のわれわれにも共通するものではないだろうか。

宮澤賢治「雨ニモ負ケズ」

「雨ニモ負ケズ 風ニモ負ケズ」で始まる詩歌は、宮澤賢治「雨ニモ負ケズ」。

これは賢治の持ち歩いていた手帳に書かれたもので、日本人ならおなじみの文章だろう。だが、全文に触れる機会はあまりないかもしれない。

そこで、今回はこの「雨ニモ負ケズ」の全文をここに紹介する。

雨ニモマケズ

宮澤賢治

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ
 慾ハナク
 決シテ瞋ラズ
 イツモシヅカニワラツテキル
 一日ニ玄米四合ト
 味噌ト少シノ野菜ヲタベ
 アラユルコトヲ
 ジブンヲカンジョウニ入レズニ
 ヨクミキシワカリ
 ソシテワスレズ
 野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
 小サナ萱ブキノ小屋ニキテ
 東ニ病氣ノコドモアレバ
 行ツテ看病シテヤリ
 西ニツカレタ母アレバ
 行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
 南ニ死ニサウナ人アレバ
 行ツテコハガラナクテモイヽトイヒ
 北ニケンクワヤソシヨウガアレバ
 ツマラナイカラヤメロトイヒ
 ヒドリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ
 ミンナニデクノボートヨバレ
 ホメラレモセズ
 クニモサレズ
 サウイフモノニ
 ワタシハナリタイ
 南無無邊行菩薩
 南無上行菩薩
 南無多寶如来
 南無妙法蓮華經
 南無釋迦牟尼佛
 南無淨行菩薩
 南無安立行菩薩

この詩文は、現在多くの人が朗読したり、メロディに載せて謡ってきた。とりわけ、二〇一一年三月十一日に東北地方太平洋沖地震と大津波によつて多くの方々が一瞬にしてこの世を去つた。そして、運あつて助かつた人たちと同じ思いで、「きずな」ということばのもとに集まつた人たちが応援歌として、歌い出したのである。本日はこの「雨」と最初に書き出した詩を実際にそれぞれがそれぞれの声で朗読してみることにする。

